明石の史跡（１００）火防観世音

『あかし昔ばなし』（神戸新聞明石総局編）に、「火防観世音（かぼうかんぜおん）」と題する話が、掲載されている（同書１４９－５０頁）。それは、法船寺から観音寺へという、寺名の改称に関する話である。

現在の、明石市二見町東二見に所在する観音寺（山号を補陀山、臨済宗妙心寺派）は、以前は、法船寺と称していた。ところが、天正９年（１５８１）５月の火災により焼失する。ところが、行基作と伝える観世音菩薩を安置した観音堂は無事であった。

文禄２年（１５９３）には、地元の有力者である横河重陳（しげのぶ）が再建。寺名を観音寺と改めた。それから１９７年を経過した寛政２年（１７９０）、東二見村の大火によるも、奇跡的に、観音堂は無事であった。２度にわたる大火を免れた観音堂にたいし、人々は、火防観世音とよんで尊敬を集めたという。

当寺には、嘉吉２年（１４４２）５月吉日の紀年を持つ、棟札が存在する。知る人ぞ知る棟札で、明石市内で現存する最古のものである（棟札の全文については、拙稿「中世の泊と松江」『戦乱に揺れた明石』２５４－５頁参照）。

堂社再建の中心的役割を果たした人物は、小川正辰である。正辰の存在は、現時点においては未確認とはいえ、赤松円心以来の守護代の家柄である。前年、嘉吉の乱で、赤松宗家は滅んだとはいえ、二見地方にも、勢力が及んでいたことを実感する。

さらにこの棟札には、「浦陀山観音寺」と明記されており、文禄２年に、法船寺を観音寺と改名したという「昔ばなし」は、信ずるに足りない。ただ、横河邸（現在は公園）と観音寺は、隣接しており、有力檀越の存在が、「昔ばなし」に反映したことは間違いないところである。その背景には、政治の仕組みの変化（封建的身分の固定）を忘れてはならないだろう。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

観音寺